

6. 韮山・大仁地域の神社の祭礼と三番叟にみる歴史的風致

三番叟^{さんばそう}とは、能楽の「翁」に登場する黒い面をつけた役(黒尉^{くろき})のことで、千歳・翁に続いて三番目に舞うところから、三番目の叟(年寄)すなわち三番叟と呼ばれている。また、三番叟の登場する部分の舞踊や謡自体を指す名称ともなっている。古くは「三番猿楽」とも呼ばれ、能では狂言方が演じ、江戸時代以降は歌舞伎の所作事としても取り入れられている。

伊豆半島には、多くの三番叟が伝承されており、人間が演じるものと、人形を用いるものに大別される。徳川家康に重用され、各地の金銀山を開発した代官頭(後に金山奉行)大久保長安(金春流猿楽師の出身とされる)が伊豆の金山開発にあたった際、各地の神社で三番叟を奉納したのが始まりという創始伝説が伝えられている。

伊豆の国市でも、韮山地域に2か所(原木・荒木神社、寺家・守山八幡宮)、大仁地域に3か所(田京・広瀬神社、三福・熊野神社、大仁・大仁神社)、計5か所に三番叟が伝わっている。いずれも人が演じる三番叟で、神輿や山車の巡行とともに、各神社の秋の例大祭の中核をなす芸能であり、地域の信仰やコミュニティ形成を考える上で、重要な役割を担っている。

(1) 韮山・大仁地域の神社の祭礼と三番叟にみる歴史的風致を構成する建造物

①荒木神社

韮山地域の北西部に位置する原木地区には、地区南部(上)に「荒木神社」、中部(下)の熊野神社、北部(一色)の愛宕神社、吉田神社と呼ばれる小祠(元々荒木神社近くの下田街道沿いに祀られていたが、道路の整備にともない現在地に移された)がある。この内、荒木神社は『延喜式神名帳』に見える「荒木神社」に比定されており、原木の総鎮守と位置付けられている。荒木神社の祭神は天津日子根命^{あまつひこねのみこと}で、境内社として貴船神社など9社が祀られている。江戸時代以前は「茨城神社」とも表記されていた。



荒木神社

荒木神社の社殿は権現造で、千鳥破風向拝付銅板葺の拝殿と切妻造銅板葺の覆屋を持つ。本殿内には近世から近現代にかけての棟札11点が納められており、この内、本殿の造り替えを示すものに、正徳5年(1715)と文化12年(1815)の棟札がある。

②守山八幡宮

韮山地域西部、狩野川と旧下田街道の間にある守山八幡宮は、第2章2及び3でも述べたように、寺家地区の鎮守であるとともに、北条の里の総鎮守としての性格も併せ持

つ神社である。祭神はほんだわけのみこと・おおやま 譽田別命・大山
つみのみこと・このはなさくやひめのみこと 祇命・木花開耶姫命の三柱である。

守山中腹に鎮座する本殿は、寛永9年(1632)に久能山東照宮祭主さかきばらてるひさ 榊原照久が造営したものであり、伊豆の国市内に残る歴史的建造物としては江川家住宅主屋(築400年と推定)に次ぐ古さとなる。寄棟造平入銅板葺の覆屋を持つ。三番叟が奉納される入母屋造銅板葺の舞殿は、昭和9年(1934)の建立である。



守山八幡宮舞殿

③広瀬神社

おおひと・たきょう 大仁地域田京の「広瀬神社」は、深沢明神ともいい、『延喜式神名帳』にも見える古社である。社伝によると、三嶋大社(三島市)が昔、白浜(下田市)からこの地に移り、さらに三島に遷祀したものと伝える。三島神の後神である三島溝織姫命を祭神とし、鎮座する田京を含めた周辺5区(みかど・しらやまどう 御門・白山堂・もりき・そうこうじ 守木・宗光寺)の総鎮守として信仰を集めている。



広瀬神社

入母屋造平入千鳥破風向拝付銅板葺の拝殿と切妻造銅板葺の本殿の他に、境内には祖霊殿・山車庫等が配置されている。『静岡県田方郡誌』の広瀬神社の項には、「明治四十四年貳万予円を投じて新たに神殿を造営し」との記述が見える。御神木の太楠を含めた境内の樹木は、「もり 広瀬神社の杜」として、伊豆の国市指定の天然記念物となっている。

④熊野神社

みふく・くまの 大仁地域三福の「熊野神社」は、熊野
はやたまのかみ・くまのふすみのかみ 速玉神と熊野夫須美神の二柱を祭神とする。昭和6年(1931)に建てられた入母屋造平入千鳥破風向拝付銅板葺の拝殿と切妻造銅板葺の本殿の他、稲荷社等の境内社が祀られている。境内には古木が多く、伊豆の国市の天然記念物「熊野神社の杜」に指定されている。



熊野神社

⑤大仁神社

大仁地域大仁の「大仁神社」は、明治維新後に、いくつかの神社が合祀されて成立した神社である。『静岡県田方郡誌』には、祭神は大山咋命おおやまくののみこととある。『増訂豆州志稿』によれば、前身の神社の内、八幡社は寛永17年(1640)に篠原氏かんじょうが勧請したとされる。入母屋造平入千鳥破風軒唐破風銅板葺の拝殿と切妻造平入銅板葺の本殿からなる現在の社殿は、昭和37年(1962)に建立されたものである。



大仁神社

(2) 韮山・大仁地域の神社の祭礼と三番叟

ア 荒木神社の例大祭と三番叟

荒木神社の例大祭は、古来10月18日に行われてきたが、現在は、10月18日に近い日曜日に行われている。昭和16年(1941)刊行の『静岡県神社志』に、例大祭催行の記事が見える。荒木神社の三番叟は、かつては祭の日の朝、神主による修祓しゅぼつの後に奉納されていたことから、「日の出三番」とも呼ばれる(現在は午後に実施)。三番叟が演じられるのは、境内の庁屋に設けられた舞台である。他の神社の三番叟と違い、舞い手が一人で、面を用いないという点が特徴で、舞台後方で大鼓・小鼓・笛が演奏する。例大祭では、三番叟の他、子ども相撲、子ども神輿の巡行としゃぎりの演奏なども行われる。子ども神輿は、荒木神社から上下の集落と吉田神社を經由して戻るルートと、荒木神社と同日に例祭を行う愛宕神社から富士美幼稚園に至るルートの2つがある。

この荒木神社の三番叟を伝承してきたのは、古くは若者組、近代にあつては青年団の存在であった。さらに、昭和53年(1978)には「原木文化財保存会」が組織され、青年団に代わって三番叟の保存にあたってきた。現在は、それを受け継いだ「三番叟有志の会」のメンバーが三番叟を演じており、地区の民俗芸能として大切に継承されている。

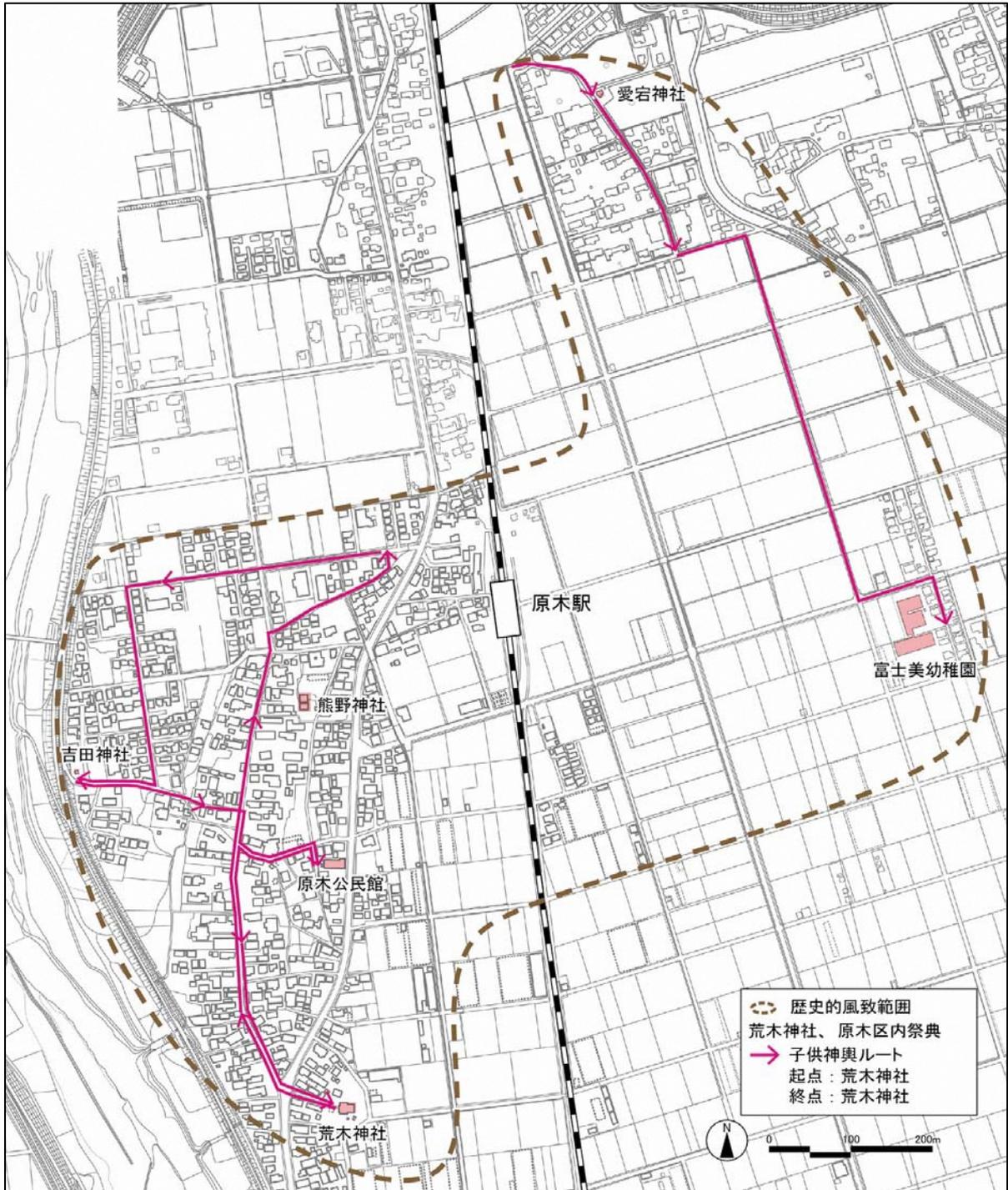


子ども神輿の途上で披露されるしゃぎり



荒木神社 三番叟

図2-6-1 荒木神社祭典 子ども神輿のルート



イ 守山八幡宮の例大祭と三番叟

守山八幡宮の例祭は、毎年10月10日に近い日曜日に行われており、境内にある舞殿(昭和9年(1934)建設)において奉納される。例祭では、まず子ども神輿の巡行が行われる。神輿は、守山八幡宮周辺及び信光寺・光照寺が面す旧下田街道を通る「西ルート」、国道136号線を挟んで東側の区域を巡る「東ルート」、古川を挟んで南側の区域を巡る「南ルート」を巡行する。



守山八幡宮 三番叟

また例祭では、三番叟に先立って、しゃぎりの演奏も行われる。昭和16年(1941)刊行の『静岡県神社志』に、例大祭催行の記事が見える。守山八幡宮の三番叟については、他の4か所にはない起源伝承が伝えられている。幕末期に、寺家の住人であった与四郎という人物が、修善寺(現伊豆市)の八幡神社の祭を見に行った時に、そこで行われていた三番

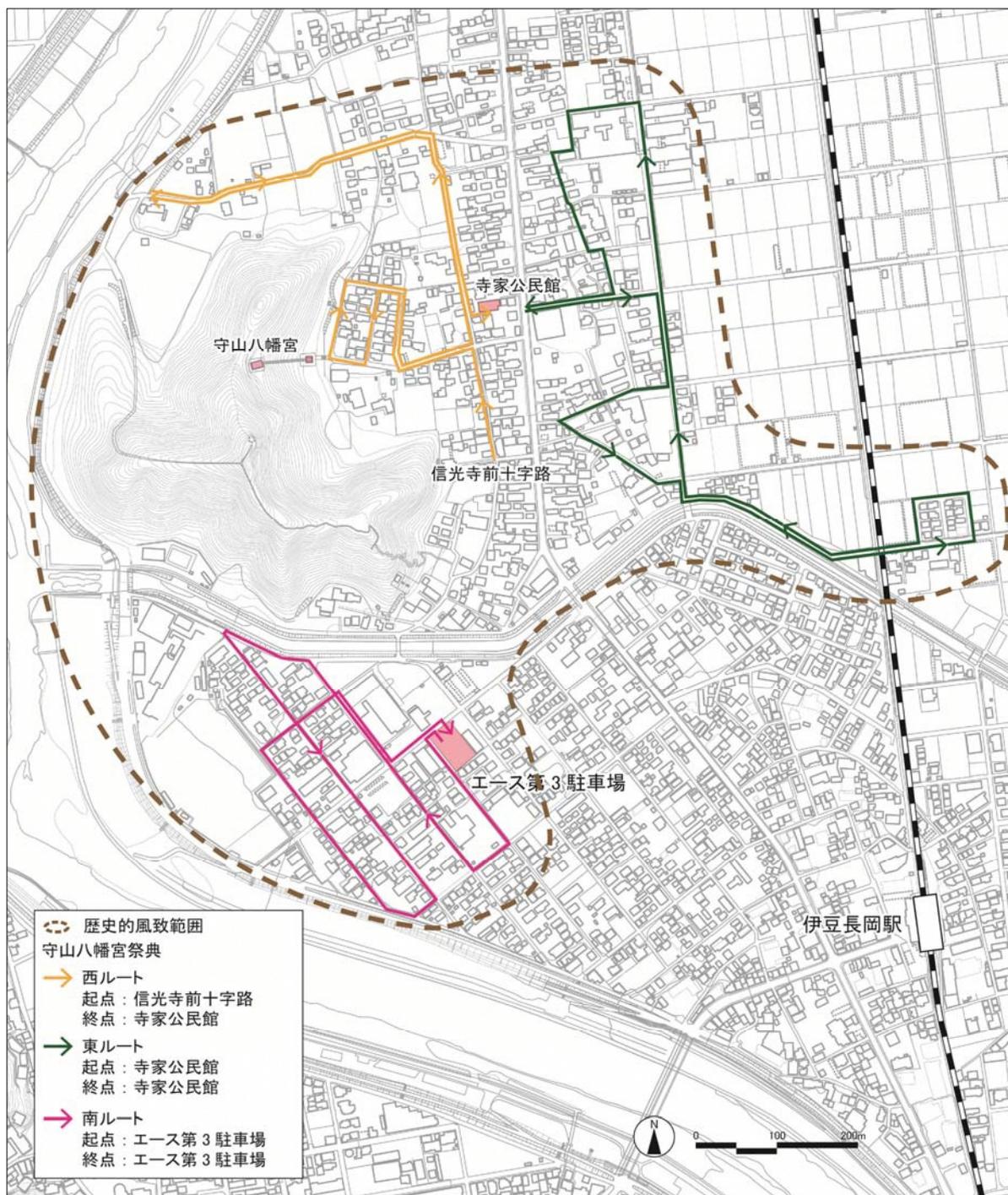


しゃぎりの演奏

叟を目にして大いに感動し、ぜひ寺家の秋祭りでもやってみたいと思い、教えを請うた。しかし、三番叟は門外不出の芸能だと断られてしまった。そこで与四郎は、翌年の練習から祭の本番にいたるまで、床下に隠れて所作などを全て覚え、それを寺家村の若者組(ワカイシュ)に教えた。以後、守山八幡宮の祭に、三番叟が奉納されることになったという。

三番叟の継承は、古くは若者組、さらには青年団が担ってきたが、昭和55年(1980)頃に寺家区長らが呼びかけて保存会が組織され、現在に至っている。

図2-6-2 守山八幡宮祭典の神輿ルート



ウ 広瀬神社の例大祭と三番叟

現在、毎年11月3日に行われている広瀬神社の例大祭では、神輿が広瀬神社を出発して各地区を巡行し、それに稚児行列が追随する。神輿は、お旅所である宗光寺の白幡神社で休憩した後、広瀬神社に還る。さらに地区ごとに山車が出て、しゃぎりを奏しながら引き回される。山車は最終的に全て合流して神輿に従い、広瀬神社に勢揃いする。広瀬神社を中心とする大仁地域のしゃぎりは、「^{ふかさわばやし}深沢囃子」と呼ばれている。

大正7年(1918)刊行の『静岡県田方郡誌』は、広瀬神社の例大祭について「古式によりて宗光寺白幡社まで神輿の御渡りあり。沿道花山車を曳き連ね、近郷よりの参拝者夥し」と記しており、盛大な祭りとして広く知られていたことがわかる。

広瀬神社の三番叟は、式三番叟と呼ばれるもので、演じる人々は山車とともに広瀬神社に向かい、到着後、神社芸能殿(舞殿)において奉納される。その起源は古く、一説には天文年間(1500年代中葉)に遡るともいう。田京には、天保13年(1842)の台本が伝わっており、少なくとも江戸時代後期から継承されていることが確認できる。

演じるのは「翁」^{せんだい}「千代(千歳)」^{くろき}「三番叟(黒尉)」の三人で、これに囃子方^{おおど}の大鼓・小鼓・笛・謡が加わる。かつては地区の青年団が継承の主体であったが、現在は、自治組織としての田京区がその役割を担っている。



各区の山車としゃぎり



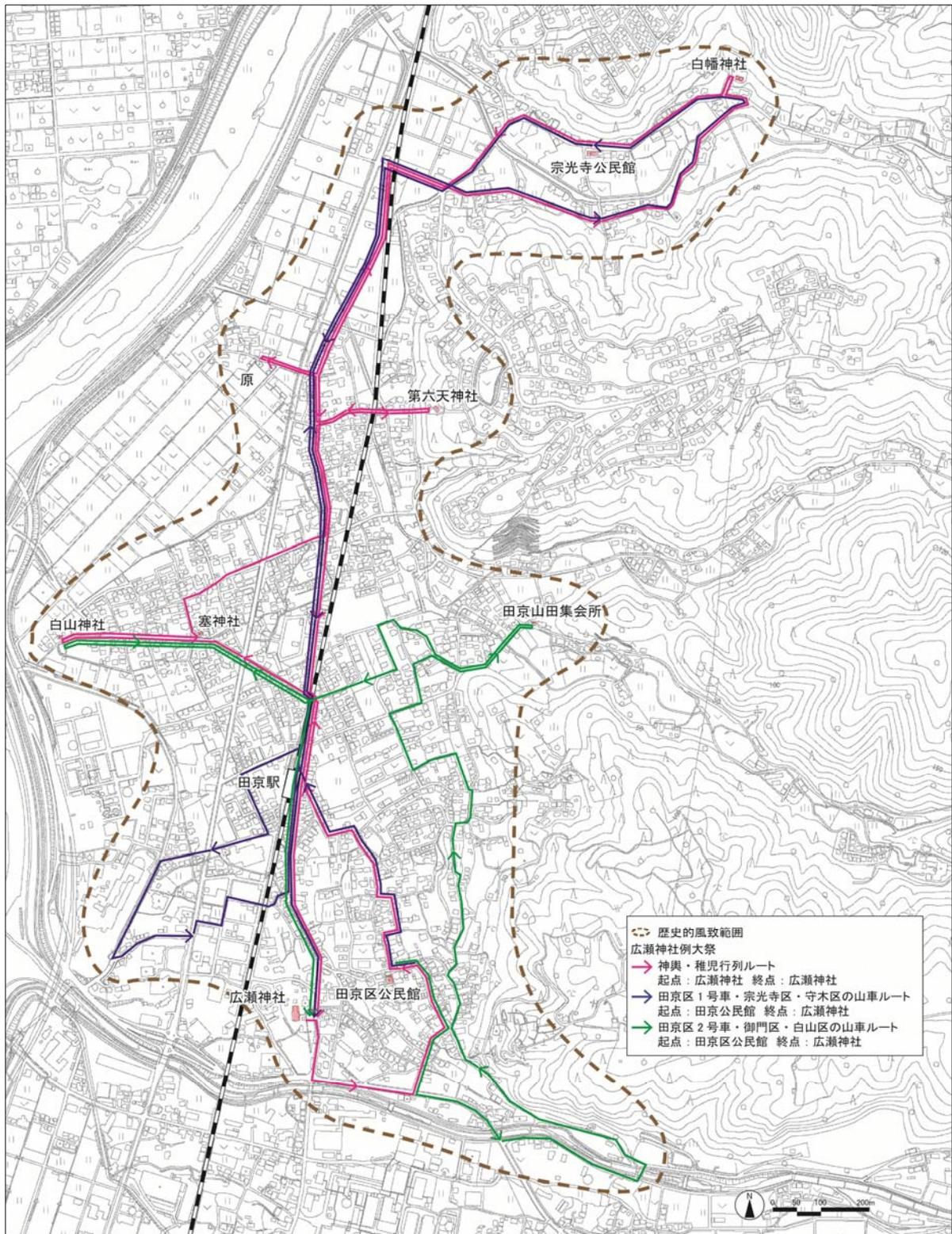
広瀬神社 式三番叟

なお、宗光寺の「白幡神社」では、毎年7月1日前後に「浅間山の火祭り」が行われている。これは、浅間山麓に位置する白幡神社から、夕刻松明を持った氏子が、行列を組んで山頂の浅間社に参拝し、御神火に点火した後、しゃぎりを奉納するものである。翌日行われる神事は、広瀬神社の神主によって執行される。



浅間山の火祭り

図 2-6-3 広瀬神社祭典 神輿・稚児行列・山車のルート



エ 熊野神社の例大祭と三番叟

寛政元年(1789)の『三福村由来記』によると、熊野神社の例大祭は9月9日とされているが、新暦で月遅れの10月9日となり、さらに現在は10月の第2日曜日となっている。

熊野神社で奉納されるのは、「種蒔^{たねまき}三番叟」である。演じるのは、地区で生まれ育った長男とされている。千代は小学生、三番叟^{くろき}(黒尉)は中学生、翁は20代から30代の青年がつとめる。笛と地方は、地元の中学生在が担当している。奉納の前、地区の公民館で衣装を整え、出発式を行った後、カナボー(金棒)を先頭に行列を組み、熊野神社に向かう。継承団体は、他の神社と同様、青年団から保存会へと移っている。

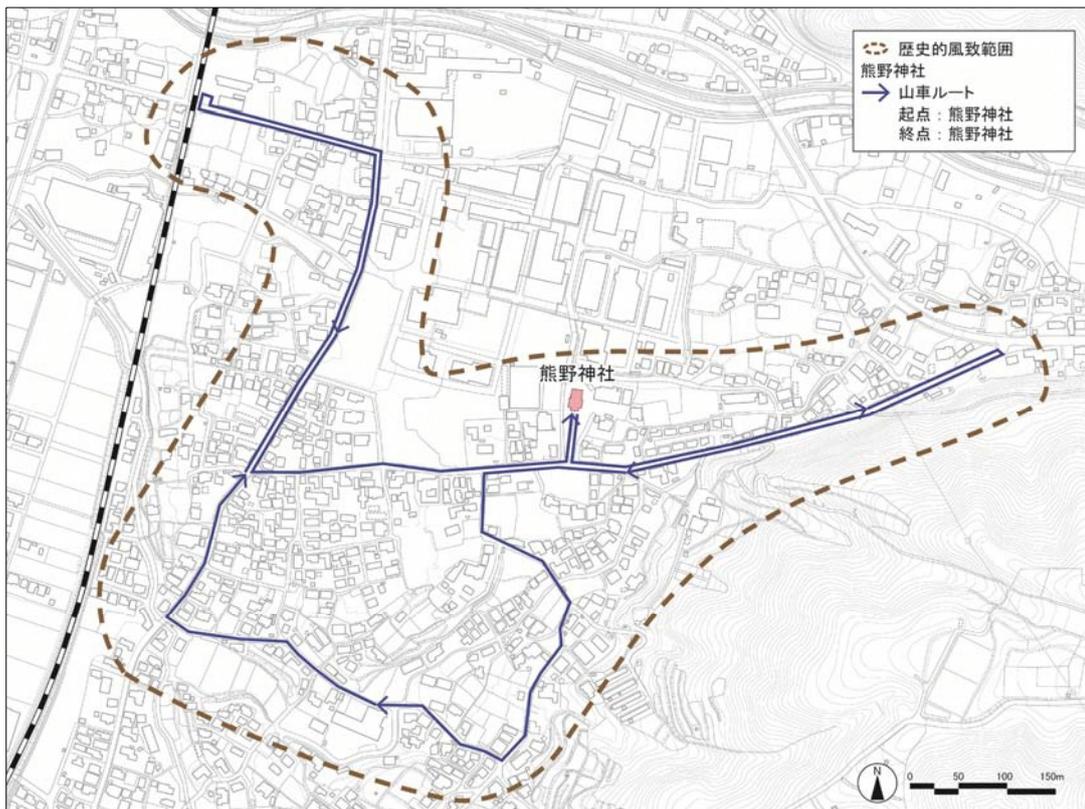


熊野神社へ向かう三番叟演者の行列



三番叟を見る人々

図2-6-4 熊野神社祭典 山車のルート



オ 大仁神社の例大祭と三番叟

大仁神社の例大祭は、明治期には10月23日に行われていたが、現在11月3日に実施されている。大正8年(1919)田方郡田中村(現在の^{大仁}地区を含む村)発行の広報誌『我が村』に、前年の10月23日に大仁神社の例大祭が執行され、盛況だったとの記事が見える。

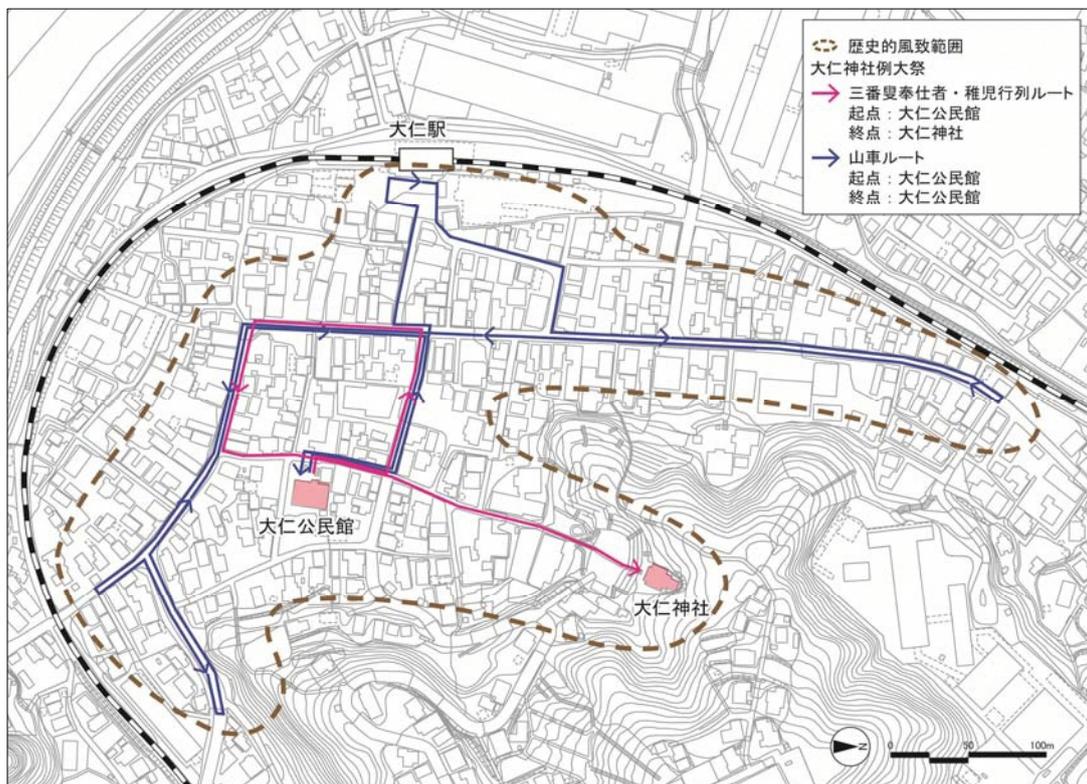


大仁神社 種蒔三番叟

大仁神社の例大祭では、熊野神社と同様、「種蒔三番叟」が奉納される。三役である千代と黒尉は12～14才の少年が、翁は22～23才の青年がつとめる。これに加えて、謡数人、笛・小鼓・大鼓が地方として演奏を担当する。公民館で準備の後、出発式を行い、行列を組んで、大仁神社までその年の当番町の通りを通っていく。継承の主体は、三福と同じく、保存会である。

行列が通過する大仁地区は、江戸時代には下田街道の宿場として、近代には伊豆箱根鉄道の終着駅として発展してきた歴史を持ち、今も伊豆石(伊豆地方で採れる凝灰岩系の石材)の蔵が残るなど、往時の雰囲気を感じさせる町並みである。また、家々には稲荷社が多く祀られており、2月の初午には、地区の子どもたちが色紙で作った幟を稲荷社に立てて廻り、かわりにお菓子をもらうという習俗が、今日も盛んに行われている。

図2-6-5 大仁神社祭典 三番叟奉仕者・稚児行列、山車のルート



(3) まとめ

荒木神社・守山八幡宮・広瀬神社・熊野神社・大仁神社の各神社の例大祭とともに継承されてきた三番叟は、土地に根付いた信仰の形を示すものであると同時に、共同体のアイデンティティーを支える重要な要素ともなっている。各神社の社殿や神輿や山車の巡行、三番叟の行列が通る町並みなどと合わせて、将来にわたって大切に維持し、向上させていきたい良好な歴史的風致である。

図2-6-6 歴史的風致範囲図

